




論文審査要旨及び担当者

報告番号 甲 乙 第 号 氏名 土田知則

論文審査担当者

主査 慶應義塾大学文学部英米文学専攻教授 巽 孝之 
文学研究科委員、Ph.D.

副査 慶應義塾大学文学部仏文学専攻教授 小倉孝誠 
文学研究科委員、Ph.D.

副査 慶應義塾大学文学部独文学専攻教授 平田栄一郎 
文学研究科委員、Ph.D.

副査 慶應義塾大学文学部英米文学専攻教授 宇沢美子 Ph.D. 

学識確認 巽 孝之 

論文題目 ポール・ド・マンの戦争

<主論文> 『ポール・ド・マンの戦争』（彩流社、2018年）

<副論文> 『ポール・ド・マン』（岩波書店、2012年）

『現代思想のなかのプルースト』（法政大学出版局、2017年）

北米イェール学派（脱構築派）の領袖として 1970 年代から 80 年代前半まで絶大な理論的影響力を誇ったポール・ド・マン（1919-83 年）は、死後四年を経た 1987 年に発覚した事実により大論争の標的に晒された。彼が戦時中に『ル・ソワール』紙に寄稿した記事「現代文学におけるユダヤ人」（1941 年 3 月 4 日付）の内容が親ナチ的・反ユダヤ的と断じられ、この文学理論家の青年時代以降の歩みに関し、根本的な見直しを計る気運が高まったのである。本論文は、この所謂「ド・マン事件」について再考することで、そこに表出する「読むことの不在」、「理論への抵抗」という現象と、それに付随する 21 世紀現在においても切実な諸問題を徹底的に検証したものである。本文中には戦時中にド・マンが執筆した『ル・ソワール』紙他五誌から訳出した 12 篇の記事が、解題とともに収録されている。

以上の文脈より、本論文は最終的にド・マンが戦後、故国ベルギーからアメリカへと活動の舞台を移す過程で生じた決定的な方法論上の転回——いわゆる「言語論的・脱構築的転回」——について考察を巡らせ、彼独自の批評概念の数々、なかでも論者たちに最も強い抵抗力を生じさせたと想像される「文字の物質性」についても詳細に論じ、ド・マン独特のアレゴリー概念を再検討して新見解を提起するに至っている。

主論文各章は以下のように構成されている。

序

第一章 「卑俗な」という危うげな一語に託して——ポール・ド・マンの選択
はじめに

一 「ユダヤ人とわれわれ」

——「現代文学におけるユダヤ人」を取り巻く三篇の記事

レオン・ヴァン・ユッフエルの記事

ジョルジュ・マルリエの記事

V・d・Aと署名された記事

二 ポール・ド・マン騒動の深淵へ——「現代文学におけるユダヤ人」

ヨーロッパ文学の伝統とユダヤ精神の位置づけ

マダガスカル島移民計画への言及

卑俗なユダヤ主義とは何か

おわりに

附録1 ドイツ占領下時代の新聞記事 四篇

訳者解題

現代文学におけるユダヤ人

シャルル・ペギー

批評の可能性について

ドイツ現代文学への手引

第二章 ポール・ド・マンと二人のコラボラトゥール

はじめに

コラボラトゥール

ロベール・ブラジヤック

政治と芸術の狭間に

「ナチ（ス）」への言及

ピエール・ドリュ・ラ・ロシエル『今世紀を理解するための覚書』

反—合理主義的テーゼ、あるいはスポーツ的な力

規範的時代としての「中世」

歴史、社会、経済、哲学、そして文学

おわりに

第三章 歴史から言語へ——ポール・ド・マンの言語論的転回

はじめに

ド・マンの歴史認識

ドイツ占領下時代の新聞記事

歴史と文学

ポール・ド・マンの言語論的転回

おわりに

附録 2 ドイツ占領下時代の新聞記事 五篇

訳者改題

フランス文学の現代的諸傾向

ヨーロッパという概念の内実

批評と文学史

フランス詩の現代的諸傾向

文学と社会学

第四章 ポール・ド・マンと「物質性」に関する二つの解釈系列

はじめに

抽象的な概念としての「物質性」

具象的なものの性としての「物質性」

中島敦の「文字禍」

デリダとジョンソンのポンジュ論

おわりに

附録 3 第二次世界大戦時代の著作 三篇

訳者解題

戦争をどう考えるか？

イギリスの現代小説

出版社の仕事

第五章 「ポール・ド・マン事件」とは何だったのか

はじめに

「読むこと」の不在

誹謗・中傷、そして的外れな戯言

「脱構築」に対する数々の無理解

「文学理論」への抵抗

おわりに

参考文献

あとがき

人名索引

論文の概要

第一章「〈卑俗な〉という危うげな一語に託して——ポール・ド・マンの選択」では、「ポール・ド・マン事件」の発端となった『ル・ソワール』紙の特集「ユダヤ人とわれわれ」に投稿された、ド・マンの「現代文学におけるユダヤ人」を含めた全四篇の記事を精読することで、当時の社会状況とド・マンが自らの記事に込めたと想像される巧妙かつ微妙なレトリックが考察される。ド・マンの記事は華やかな絵や写真を付された他の記事の右下隅に、目立たぬようひっそりと掲載されており、そこには、養うべき家族を抱えた弱冠 21 歳の若者が、ナチ統制下のブリュッセルでぎりぎり書き付けることができたと思われる、綱渡り的なエクリチュールを確認することができる。彼の策略は、冒頭の一文「卑俗な反ユダヤ主義 ["l'antisémitisme vulgaire"] は、ユダヤ化されているという理由から、戦後（1914 年から 18 年にわたる戦争後）の文化現象を墮落頹廢したもののみならずことに欣々としている」に潜む。後の脱構築的分析を先取りするかのように見えるこの一節は、文章の明快で一義的な解釈の可能性を宙吊りにしている。ここにいきなり配された「卑俗な」"vulgaire" という形容詞は、いったいいかなる意味作用を担っているのか。この一文は反ユダヤ主義を称揚しているのか、あるいはそれに異を唱えているのか。「卑俗な」という一語がなければ、この一文は明らかに反ユダヤ主義を批判するものになってしまい、ド・マンの生命を危険に晒すことになったであろう。この一語が存在するために、この一文はかろうじて反ユダヤ主義を否定しない性質のものとなりおおせているのである。つまり、「卑俗な」という語は、ある特定の反ユダヤ主義のみを形容するものであり、他に純正な反ユダヤ主義、すなわち、道義上いささかも問題のない、尊重すべき反ユダヤ主義が存在するという解釈をどうにか成立させる。そしてもう一つ可能な解釈は、反ユダヤ主義は総じて卑俗的であり、例外はあり得ないというものだ。カフカやベギーへの言及に注目するなら、後者の可能性が濃厚だが、その点を見なければ、どちらがより妥当な解釈であるかを見定める根拠はない。ド・マンの身が安全だったことを考慮するなら、当事者たちがこの巧妙極まりないド・マンのレトリックに気づかなかったことは明らかである。ド・マンは確かに反ユダヤ主義を標榜する『ル・ソワール』紙の特集コラムに一稿を投じた。それは紛れもない事実である。しかし、それでもなお、この記事の有する非協調的なスタイルは、ド・マンが親ナチ的であったとする機械的な解釈に亀裂を生じさせ、言説の内部に潜むアポリアを暴き出すものとなっている。

第二章「ポール・ド・マンと二人のコラボラトゥール」では、「現代文学におけるユダヤ人」とほぼ同時期に執筆された二人の対独協力作家（コラボラトゥール）であるロベール・ブラジャック（1909-45 年）に関する記事「ロベール・ブラジャック『われらの戦前』」（1941 年 8 月 12 日付）と、ピエール・ドリュ・ラ・ロシエル（1893-1945 年）に関する記事「ドリュ・ラ・ロシエル『今世紀を理解するための覚書』」（1941 年 12 月 9 日付）を取り上げている。これら二人の作家を、ド・マンはどのように読んでいたのか。ブラジャックについての記事には後に対独協力者になるブラジャックの思想に加担し、それを積極的に擁護するといった意図は微塵も感じられない。他方、ドリュに対しては辛辣で、その作品に「否定しがたい活力の徴」、すなわちユダヤ的なもののアンチ・テーゼとしての「活力」を認めていた。

第三章「歴史から言語へ——ポール・ド・マンの言語論的転回」は、ド・マンがベルギーからアメリカに居を移し、やがて「イェール学派」の領袖としての地位を確立する過程で生じたと考えられる思想的な大変革——「転回」——について考察している。アメリカ

に渡った後のド・マンは徹底して反-歴史的な立場を表明し続けたが、ドイツ占領下の彼の著作には、後期のそうした姿勢を予測させるような要素はほとんど見受けられない。後期の著作では負の価値を背負うことになる用語や理念がこの時期には頻出し、枢要なキーワードの役割を担わされている。具体的に言うなら、ベルギー時代に書かれたものには、その後例外なく批判の対象として位置づけられることになる「統一性」、「一貫性」、「均質性」、「総合」、「完全調和」、「オリジナリティ」、「美の源泉」、「客観的現実」、「調和のとれた物語」、「よりよき統制」などといった用語や表現が、歴史との関係において、高々と掲げられ称揚されている。特に注目されるのは、1942年6月7-8日に掲載された「批評と文学史」という記事に見られる「内的-一貫性を有する創造的な現象」という表現である。こうした言い方が後期の脱構築的な視点と根本的に対立するのは明らかだろう。かくして本性では、ベルギー時代と後期の間「隔絶」、「断絶」を生じさせたものは、「歴史」から「言語」へ、あるいは「歴史」から「修辞」へという意識転換、いわばド・マンの「言語論的転回」の結果であったことが確認される。

第四章「ポール・ド・マンと〈物質性〉に関する二つの解釈系列」は、ド・マンの脱構築批評にとって最重要にして最も晦渋と思われる「物質性」という概念の解釈を検討する。「物質性」という概念を純粋な抽象的理念と捉えるか、はたまた具象的な「もの性」として考えるかについては、同じ批評家・研究者のなかでも微妙な揺れ動きが認められる。特に盟友にして脱構築の元祖ジャック・デリダの場合は、少なくとも「物質性」の問題に関する限り、明らかに逆向きの関心に引きつけられている。つまり、「物質性」という概念は、具象的な「物質=もの」と抽象的な理念の双方に関係し、両者を結びつけると同時に引き離しているのだ。このことは、「物質性」が「アレゴリー」の機制を示す下位概念の一つとして機能している可能性を指し示している。

第五章「〈ポール・ド・マン事件〉とは何だったのか」は、反ド・マン陣営の大物歴史学者として「ド・マン事件」をミスリードしたジョン・ウィーナーを例に、この事件の背後にあったものを明らかにする。特に『応答——ド・マンの戦後ジャーナリズムについて』（1989年）に掲載されたJ・ヒリス・ミラーの批判文書「ジョン・ウィーナー教授への公開質問状」が、ウィーナーらに見られる「読むこと」の決定的な不在という問題を露呈させた点に注目する。ウィーナーの言明は、ジュリア・クリステヴァの研究を反ユダヤ主義と決めつけるばかりか、「現代文学におけるユダヤ人」をはじめ「コラボラトゥール」やシャルル・ペギーに関する記事にも目を通しておらず、クルト・ヨーゼフ・ヴァルトハイムとド・マンを同一視し、資料をオリジナルのフランス語のまま提示することをダメージ・コントロールと断じ、あまつさえハンス・ローベルト・ヤウスがイェール大学で教鞭を取っていたことにかこつけてド・マンを彼の共謀者と主張するに至っており、まさしく奇怪かつ杜撰としか形容しようがないからだ。

ミラーが次に注目するのは、「脱構築批評」に対する数々の誹謗中傷が、当のミラーをはじめ、ジャック・デリダをもファシストと決めつけたことだ。それは、より巨視的に眺めるなら、ド・マン自身が最晩年に喝破していた「文学理論への抵抗」そのものだ。ド・マンの糾弾者たちを真に突き動かしていたのは、自分たちがこれまで執拗に守り抜き、その権威・権力を維持してきた旧来型の研究法が、「脱構築」など外来新種の侵入・到来により決定的な破壊を被るのではないかという強迫観念めいた不安・恐怖に他ならない。「ポール・ド・マンの戦争」とは、究極的に文学理論をめぐる戦争だったのである。

審査の要旨

ド・マン事件については、旧来、この不世出の文学理論家が戦時中に対独協力的な複数の媒体に文章を寄稿していたという事実のみをもって弾劾し、ファシストないしユダヤ人差別主義者とみなす傾向が濃厚であった。しかし土田論文はその第一章で、それでは具体的にそれらの媒体におけるド・マンはいかなる位置を占めていたのかを、ド・マン以外の寄稿者たち——とりわけレオン・ヴァン・ユッフエル、ジョルジュ・マルリエ、V・d・Aと署名された著者たち——の記事を熟読することで検討し、彼らのほうがド・マンなど比べ物にならないくらい濃厚な反ユダヤ主義的論調に満ち溢れていたことを明かす。問題となったド・マンの「現代文学におけるユダヤ人」の場合も、彼が高く評価する作家にドイツ人は一人も含まれておらず、むしろスタンダールやジッド、ヘミングウェイ、ロレンスらと並び、まぎれもなくユダヤ人作家であるフランツ・カフカの名が挙げられていることにも、土田君は着目する。しかも、冒頭では「反ユダヤ主義」というキーワードにさりげなく「卑俗な」という形容詞が付され、著者自らが典型的な反ユダヤ主義者とは一線を画す防御柵として機能しているという洞察は鋭い。その関連で、第二章は真の対独協力者の名に値するロベール・ブラジヤックと、ピエール・ドリュ・ラ・ロシェルらの言説とド・マンの寄稿がいかに隔たっているかを論証し、第五章はミラーとウィナーの論争においてド・マン批判者がいかに「読むことの不在」を露呈させたかを例証する。

本論文を意義あるものにしてしているのは、ド・マン事件の本質へ肉薄するのみならず、そこから浮上する彼の批評理論の本質へも、先行研究では見られないほど深く切り込んでいることだ。第三章で俯瞰される戦後、ベルギーからアメリカへ移住したことを遠因とする「言語論的転回」を基本に、第四章では、ド・マンの中でも最も難解とされる文字の「物質性」という問題を再検討するのに、「文字禍」、「悟浄出世」、「かめれおん日記」などの作品を、ベルギー時代のド・マンと同じ頃に執筆していた中島敦（1909-42年）を補助線に用い、土田君の理論が比較文学的にも豊穡な可能性を孕むことを示す。中島自身の「歴史」、「出来事」、「器械=機械」、「自由意志=意図」への拘りをはじめ、「文字」とは本来「単なるバラバラの線」、「単なる線の集合」、すなわち「物質」に過ぎないのだが、それがやがて特定の音や意味と擬似必然的な関係を取り結ぶさいに「文字の精霊」が介在するという考え方は、ド・マンが批判した「美学イデオロギー」とまさに同種の趣を呈しているという指摘は示唆に富む。目下、円城塔や飛浩隆など、中島敦の21世紀的な書き直しとも呼べる試みを果敢に行っている現代作家が活躍している状況下、ド・マンの理論がさらなる新境地を拓きうることを、土田論文は推察しているのである。

以上のように本論文の基本的な意義を認めた上で、審査委員会は2018年12月12日（水）の夕刻に東館8階小会議室に集合し、土田君の公開口頭試問を行った。

まず問題とされたのは、土田君の長い研究史において、たとえば『プルースト——反転するトポス』（新曜社、1999年）ではド・マンの誤訳に基づく創造的翻訳を許容する読みを示し、『ポール・ド・マン——言語の不可能性、倫理の可能性』（岩波書店、2012年）においては「読むことの不可能性」を掘り下げているにも関わらず、今回の『ポール・ド・マンの戦争』では土田君自身のド・マン論が正読であり、他方「理論への抵抗」を示しド・マンを対独協力者として非難した批評家たちのド・マン論は全て誤読として弾劾されているようにも響くことであった。それはド・マン自身の誤読ならば正しく、彼の批判者による誤読は間違っているという二項対立が前提とされているような印象を与える。口頭試問ではこの点について、土田君からどんな人にも誤読はつきまとうこと、ド・

マンは formalist で脱構築学派のなかでは最も柔軟さに欠けるという説明が施された。また審査団からは、フランス文学ではプーストにも同様な誤読理論があること、ドイツ演劇学の脱構築学派は「すべての読みは誤読であるように、すべて見るものは誤認である」と前提していること、西欧近代の思想発展における世界誤認の重要性は見過ごし得ず、土田君の著作はドイツ演劇学から見ても高い見識水準から議論していることが指摘された。

それでは、具体的に 1941 年頃のだ・マンのテキストと後年 1960 年代以降のテキストに連続性はあるのか。この問いに対し、土田君は「本論文第 1 章で扱った記事においては連続性を見出せるが、ほかの記事を見るとほとんどつながらない」と回答したが、これはそのまま、1970 年以降のだ・マンが時に反歴史的とも評される修辞学的読解を展開したこととも無縁ではない。その頃にはフランスでも歴史叙述の文法が根本的に変革されるからだ。この問題について、土田君は戦時中の対独協力的身振りに対して、だ・マンが歴史学批判のかたちで自己弁護をしていたのではないか、という説があることを紹介した。また、だ・マンにおいて重要な概念として“event”があるが、そこには現に生じていることすべてを“event”と定義し、それを語るには物語にしかかなり得ないという独特な視座がある。これがフランス語の“événement”とは異なっただ・マン独特の用語であり、だ・マンの考えていた歴史叙述と、その同時代的なアナール学派の路線との間にもズレが生じていることが確認された。また、ドイツ演劇史の視点からはだ・マンが反歴史というよりも“radical history”や“another history”と呼ぶべきものをアレゴリーと呼んでいたように解釈しうることについて、土田君は「だ・マンの反歴史性とは、歴史学の伝統的な方法論に対する否定であり、歴史叙述は物語と同じように変わることを指摘し、歴史と文学を区別する意味はどこにあるのかと問うものだ」と議論を建設的に発展させた。

とはいえ、審査団は土田君が批評理論史において見過ごしている文脈についての疑問も呈した。たとえば、だ・マンがあれだけの壮大な批評理論の体系を構築しながら、ジェンダーやセクシュアリティについてはついぞ論じなかったのはなぜか。戦時中のだ・マンがナチス・ドイツの言論統制下でゲリラ戦を戦ったのと同じく、1960 年代以降のフェミニストたちも家父長制下の言語的制約のさなかでゲリラ戦を戦っていた。だ・マンの同僚ないし高弟に当たる女性脱構築批評家たち、ショシャナ・フェルマンやバーバラ・ジョンソンやガヤトリ・スピヴァクはみな物語学と歴史とジェンダー論を接続していた。これはフェルマンやジョンソンの邦訳者でもある土田君だからこそ、本来ならば盛り込んで欲しかった視点である。さらに、イエール学派には客員教授であるデリダ以外にもハロルド・ブルームやジェフリー・ハートマンといったユダヤ系の学者批評家がいたにも関わらず、本論文では彼らとだ・マン自身の関係性ないし距離感が今ひとつはつきりしない。

加えて、本論文で一番の争点となっているだ・マン自身の表現「卑俗な反ユダヤ主義」“l'antisémitisme vulgaire”についても、1940 年代ベルギーのフランス語と現代フランスのフランス語では多少ニュアンスが違うのではないかという疑念も出された。日本語で「卑俗な」と訳すと価値判断が含まれるが、「通俗的な」という意味での“vulgaire”には、価値判断は含まれない。比較的おとなしい形容だと取れないこともないからだ。

とはいえ、本論文が現時点でポール・だ・マンを再評価し理論的展望を与えるのに最も精緻な力作であることは明白であり、むしろだからこそ審査団は本論文に触発され、専攻の垣根を超え文学理論の将来に向けた建設的討議を展開するに至ったものである。『ポール・だ・マンの戦争』が文学理論の進展に大きく貢献し、論文博士に充分価する業績であることについては、審査団全員が同意するところである。よって審査団一同は土田知則君の論文を博士（文学）の学位授与にふさわしいものと判断する。（2019 年 1 月 15 日）